

病床生活におけるプライバシー意識

——患者と看護者の相違——

野々村典子* 中野育子** 城戸滋里***

A study of patient's feelings for privacy in hospital

——Differences in feelings between patients and nurses——

Noriko Nonomura, Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

Ikuko Nakano, Kitasato University East Hospital

Shigeri Kido, Kitasato University

Abstract

The purpose of this research is to evaluate and analyze the relation between patient's feelings and nurses's feelings about privacy in hospitals.

Research was performed by using the same participant observation method in all groups. The results from a group of 27 intractably nervous patients (group A) , a group of 54 orthopedic patients (group B) and 69 nurses were as follows :

Patient's feelings of privacy are different from the reality of a patient's routine life in hospital. Group A subjects were anxious about changing clothes and bed baths. Group B subject were anxious about excretion activities. There was an especially, high tendency for this amongst women patients.

The degree of anxiety was different for the observed items according to age. Nurses felt there was a need for privacy during excretion activities and bed baths. In addition, it was suggested that women and young patients have a higher need for privacy.

* 茨城県立医療大学 ** 前北里大学東病院 *** 北里大学

キーワード

プライバシー privacy

患者の意識 patients' feelings

看護者の意識 nurses' feelings

病床生活 hospital life

I はじめに

生活の場であるベッドや周辺の環境を整え、患者がより快適に入院生活を送ることができるように援助することは看護者の重要な役割である。

筆者らは、入院患者の病床生活における環境への心理的側面をテリトリーとプライバシーの意識から把握すること目的とした調査を行い、報告してきた^{1,2)}。

その調査結果で、看護実践者である筆者らが特に注目したことがある。それは、寺島⁴⁾・小川⁵⁾・村田⁶⁾らの指摘に代表されるように、病院環境における患者のプライバシー尊重について、看護者の一般的な考え方と違っていたことである。プライバシーへの配慮から問題となることは、患者が気にしているのに看護者が気にしていないことである。

そこで本研究の目的を、看護者が患者の病床におけるプライバシーについてどのように認識しているかを調査し、患者の意識との相違を明らかにすることから、よりよい援助への基礎的資料とする、とした。

なお、プライバシーを「自分の望んでいない侵入事物に対して、調整しようとする心理的な防壁」とする。

病床環境についての先行研究としては、建築学分野に多い^{3,7-13)}。看護学領域における最近の研究では、服部による病室や病棟の環境と患者の精神状態や日常生活行動との相互作用についての報告¹⁴⁾と馬場らの入院中の生活規制に対する

る意識調査がある¹⁷⁾。また、川口らは、建築学を基礎とした看護学の立場から病室の療養環境について物理的・心理的観点から多くの検討を行っている^{14-16,19,20)}。これらの研究は集団調査がほとんどであり、松岡の指摘する入院患者の生活に即した実感認識の実態を把握するため⁷⁾、疾患の種類や生活の自由度を限定した調査が必要と考えた。

II 研究方法

1. 対象

本研究における母集団は、都市圏にあり設置主体が同じである2つの大規模な私立大学病院（以下A院・B院とする）の入院患者である。A院（507床）は開院が1986年であり、B院の15年後に開設され慢性期医療を主としている。B院は開院が1971年であり、1069床の急性期医療を行っている。

患者意識の傾向を知るために、患者調査の対象をA病院の2病棟128床のうち4床室にいる神経系難病患者（以下A群とする）およびB病院の2病棟92床のうち4床から7床室にいる整形外科疾患者および耳鼻咽喉科疾患者（以下B群とする）で、15歳から79歳の聞き取り調査の可能な人とした。

看護者調査は、患者調査と同じ4病棟の看護者（看護婦・保健婦）102人全員を対象とした。

2. 期間

1) 患者調査

A群は、1993年3月9日から3月15日までであり、B群は、1991年11月12日から11月22日までである。

2) 看護者調査

1993年10月18日から10月31日である。

3. 調査内容

先行研究である川口らのものの一部を用いた^{11,15)}。患者調査の調査項目は、患者の属性、ベッドの位置と好きな位置、在院期間、診療科、生活の自由度（安静度）、テリトリー意識のタイプ、病床における日常生活行動 9 項目に関するプライバシーの意識、病床環境について日頃思っていること、である。本論は、その病床における日常生活行動 5 項目に関するプライバシーの意識についてである（表 1 参照）。

なお、日常生活行動としては、ベッド上における食事中、衣服の着替え中、清拭中・整容動作中、大小便（排泄）中、診察・処置中、睡眠中、読み書き中、家族との会話中、医師・看護婦との相談中の 9 項目である。

看護者調査は、患者調査と同様の調査票を用いた。調査内容は、入院患者が病床での日常生活行動で感じているテリトリーとプライバシー意識の程度に対する看護者のとらえ方および患者の病床環境についての考え方、である。患者の条件は、性別と年代をあげた。

行動している患者が隣のベッドの人を意識する程度は 3 段階とし、Ⓐ気になる、Ⓑどちらでもない、Ⓒ気にならない、である。

表 1 調査の内容

ベッドの上で、以下の行為をしているときの、隣のベッドの人に対する意識の度合い（気になる度合い）を調査する。

1. 衣服の着替えをしているとき
2. 体や顔を拭いたり、お化粧をしているとき
看護者には、清拭（せいしき）に変更
3. 大便や小便をしているとき
4. 診察、処置を受けているとき
5. 家族と会話しているとき

他

4. 方 法

患者調査は、質問紙による聞き取り調査法である。調査員は両群同じであり、神経系難病患者への調査にはその看護の経験者が聞き取りにあたった。

看護者調査は、質問紙による自記式留置法である。

III 結 果

1. 対象者の概要

結果は、表2に示した。協力承諾が得られた有効回答者は81人であり、A群が27人、B群が54人であった。ただし、一部無回答項目がある。また、B群の70歳以上が無効回答であったため、これを削除した数とする。

年齢は、A群は50歳以上が59%と多く、年齢層が高い。B群は10代から各年代に平均的に分布している。入院日数は、A群は数か月以上の人が多く、ケースによっては生涯病院で過ごさざるを得ない人もいて長期の入院生活である。B群は、2か月未満の人が75%と短期間である。また、生活の自立度もA群が介助を必要とする人が67%である。B群は31%と自立度が高い。

調査承諾および有効回答が得られた看護者数は69人であり、A群の看護者が43人、B群の看護者が26人であった。ただし、一部無回答項目がある。

統計処理にはカイ二乗検定と、比較する2つの属性間の関連を数値で表すためにクラメールの関連係数を用いた。各調査結果に加え、両群患者間および看護者間、各群患者および看護者間のすべてについての意識の相違をクラメール関連係数により整理したものを表3に示した。

2. 患者のプライバシーの意識

隣のベッドの人への意識の度合い（気になる度合い）について、病床での日常生活行動9項目を3段階で調査した。結果は図1に記した。

表2 A・B群患者の概要

		A群	27名	B群	54名
性 別	男 性	12		33	
	女 性	15		21	
年 齢	10歳—29歳	2		16	
	30歳—49歳	9		18	
	50歳—69歳	12		20	
	70歳以上	4		0	
部 屋	6 床室と 7 床室	/		41	
	4 床室	27		13	
ベッドの位置	6 床 7 床 室	ドア側	/	16	
		中央	/	12	
		窓側	/	13	
	4 床 室	ドア側	11	6	
		窓側	15	7	
入院日数	2 週間未満	7		13	
	2 週間以上—4 週間未満			14	
	4 週間以上—8 週間未満	7		13	
	8 週間以上			14	
	3 か月—6 か月未満	5		0	
	6 か月以上	8		0	
生活の自由度 (安静度)	自立 (IV)	9		37	
	半介助 (II, III)	12		17	
	全面的介助 (I)	6		0	

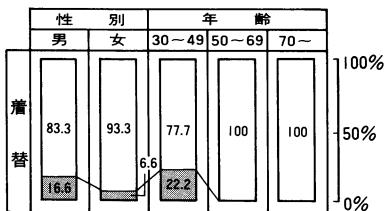
A群：神経系難病

B群：整形外科疾患46名+耳鼻咽喉科疾患8名

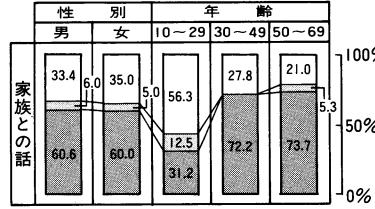
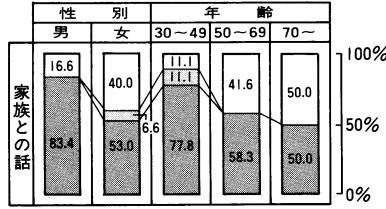
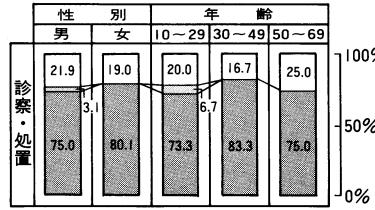
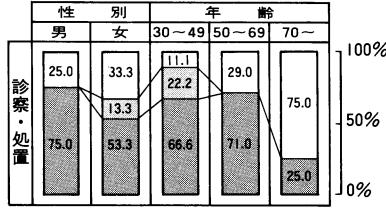
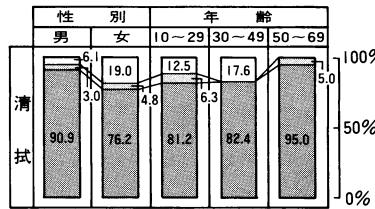
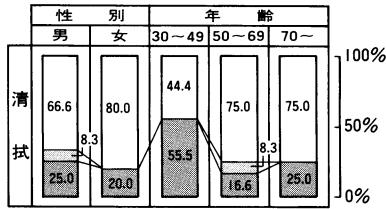
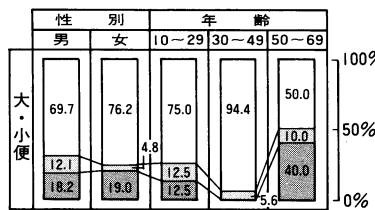
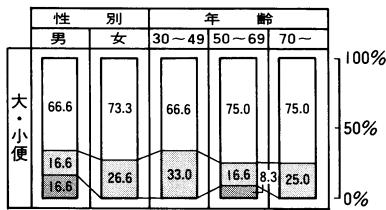
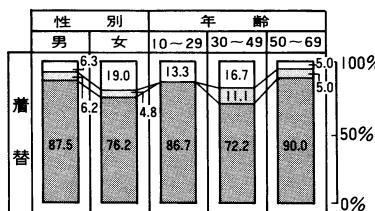
日常生活行動については、A群の場合気になる度合いの高い項目は、着替え時、大小便時、清拭時の順であった。B群の場合、高い項目は、大小便中が圧倒的であり、家族との話、診察・処置中と続き、A群と違う傾向を示した。クラメールの関連係数は、数値が1に近づくほど両者間の相違が大きいことを示しているが、この結果は着替えと清拭に高い関連を示した(表3参照)。両群のこの違いについては、介助を受ける度合い（生活の自由度）や援助方法などが

病床生活におけるプライバシー意識

〔A群患者〕



〔B群患者〕



■ 気になる ■ どちらでもない ■ 気にならない

図1 A・B群患者のプライバシー意識の比較

表3 クラメール関連係数による患者と看護者の意識の相違

	患者性別		患者年齢別			
	男	女	10-29	30-49	50-69	70-
着替え中	①	0.771	0.733	—	0.601	0.936
	②	—	—	—	0.391	—
	③	0.338	—	0.477	0.325	0.421
	④	0.760	0.838	0.897	0.864	0.916
大小便中	①	—	—	—	—	—
	②	—	—	—	—	—
	③	0.397	0.457	0.698	—	—
	④	0.343	—	0.411	—	0.520
清拭中	①	0.461	0.669	—	—	0.832
	②	—	—	—	0.306	—
	③	0.485	—	0.477	0.578	—
	④	0.794	0.837	0.873	0.861	0.961
診察・ 処置中	①	—	—	—	—	—
	②	—	—	—	—	—
	③	0.894	0.629	0.701	0.722	0.742
	④	0.682	0.792	0.732	0.816	0.773
家族との 会話中	①	—	—	—	—	—
	②	—	—	—	—	—
	③	0.542	0.557	—	0.590	0.505
	④	0.706	0.615	0.479	0.712	0.764

①:A群患者 V S B群患者 ②:A群看護者 V S B群看護者

③:A群患者 V S A群看護者 ④:B群患者 V S B群看護者

—:有意差なし

考えられる。

性別では、A群の女性が全項目中、着替えが最も気になっていた。また、全項目で気になる度合いが女性のほうが高い結果であった。B群でも診察・処置以外は女性が全体的にやや高く、女性のプライバシーの意識が男性より高いといえる。年齢では、A群の50代・60代が30代・40代に比べて、全項目に気になる度合いが高かった。

B群では大小便時に30代・40代が高く、家族との会話時には10代・20代が高い。50代・60代は全体的に気になり度が低い傾向であった。このようにA群では高年齢者にプライバシーの意識が高く、B群は、生活行動によって違う結果であった。

3. 看護者の意識

A群およびB群の看護者が患者の病床におけるプライバシーについてどのように認識しているかを調査した結果は、以下のとおりであった。

生活行動場面での気になる項目別では、A群およびB群の看護者は共に、大小便中、清拭中、診察・処置中、着替え中、家族との会話中の順であり、看護者間の有意差がなかった。気になる度合いも、患者は場面差がなく気にしているという回答が多かった。特にB群の看護者が一様にとらえる傾向にあった。

性別にみると、男性に比べて女性のプライバシー意識を高くとらえていた。また、年齢については、年代が若いほど気になり度が高いととらえている。ただし、30歳以上のA群の着替えと清拭について、どちらでもないと答えている看護者が多く、あまり気にしていないととらえる傾向にあった。

4. 多床室入院患者と看護者のプライバシー意識の比較

日常生活行動場面におけるプライバシーについての気になる度合いを患者と看護者とに調査し、両者の意識の相違について統計処理を行った結果を表3に記した。ただし、患者調査の結果から患者群による意識の違いがみられたため群別の比較とした（表4・表5参照）。

1) 4床室のA群患者とその看護者の場合

気になる度合いの高い項目の順位については、患者の調査結果は、着替え中、大小便中、清拭中の順であった（図1参照）。

これに対して看護者は、大小便中、清拭中、着替え中の順であり、両者の意識にズレがみられた（表4参照）。それは、A群の着替え中の男性、家族との会話時の男性であった。同じく着替え中の50代・60代の人であった。

表4 A群患者と看護者のプライバシー意識の相違

	患者性別				患者年齢別								
	男		女		10-29		30-49		50-69		70-		
	患者	看護者	患者	看護者	患者	看護者	患者	看護者	患者	看護者	患者	看護者	
着替え中	気になる	10	20	14	28	1	36	7	28	12	21	4	13
どちらでもない	0	14	0	2	0	4	0	11	0	15	0	8	
気にならない	2	7	1	1	1	1	2	2	0	5	0	10	
カイ二乗検定	*		—		**		—		**		—		
大小便中	気になる	8	37	11	40	1	40	6	36	10	32	3	25
どちらでもない	2	3	4	0	0	0	3	4	1	8	1	12	
気にならない	2	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	3	
カイ二乗検定	—		***		***		—		—		—		
清拭中	気になる	5	25	13	36	1	35	4	27	9	20	3	18
どちらでもない	1	13	0	6	0	5	0	12	1	17	0	15	
気にならない	6	3	2	1	1	1	5	2	2	4	1	8	
カイ二乗検定	**		—		**		***		—		—		
診察・処置中	気になる	2	26	5	35	1	30	1	28	2	24	3	18
どちらでもない	0	14	2	4	0	10	2	11	0	13	0	18	
気にならない	10	0	8	1	1	0	6	1	10	3	1	4	
カイ二乗検定	***		***		***		***		***		—		
家族との会話中	気になる	8	13	6	17	1	18	1	16	5	14	2	11
どちらでもない	0	22	1	21	0	19	1	20	0	21	0	22	
気にならない	4	6	8	3	1	4	7	5	7	6	2	8	
カイ二乗検定	**		***		—		***		**		—		

カイ二乗検定：* P < 0.05, ** P < 0.01, *** P < 0.001, —(有意差なし)

(1) 「着替え中」

男性患者は、看護者が思っている以上に気にしているという結果であった。女性患者の場合は両方が気にしていた。年代別では、年齢が高い患者ほど気にしており、看護者は気にならないと思っているという差がみられた。

(2) 「大小便中」

性差がみられるが、看護者が思うほど患者のほうは気にしていない結果であ

った。実数によると看護者は気にしない男性患者はいないと思っているが、患者の中には気にならないと答えた人が2人あったこと、また女性についても看護者はすべて気になるととらえているが、患者にはどちらでもないと答えている人が4人あることによる。

年代別では、10代から40代まで看護者のほうが気になると強く感じていた。

50代からはズレはなく、双方が気についている結果であった。

(3) 「清拭中」

男性については、患者より看護者のほうが気になっていると思っている結果であった。女性では、両方が気になると思っていた。年齢別では、看護者は年齢が高いほど気にならないと思っている。しかし、30代・40代の患者は看護者が思う以上に気についているという結果であった。

(4) 「診察や処置を受けているとき」

男女共に有意差があり、患者は気にしていないが看護者は気になっていると思っていた。年齢別も同様であり、各年代共に看護者のほうが気になっているととらえている。

(5) 「家族との会話中」

男女共に患者と看護者間に有意差があった。看護者に比べて、男性患者のほうが気についているが、逆に女性は気にならない人が多い結果であった。年齢では、30代から60代の患者があまり気についてないことがわかった。しかし、この年代は、看護者は気になる人が多いと答えている。

10・20・70代の患者は、気になる人と気にならない人に分かれていた。また、看護者は、他の項目に比べてどちらでもないと答えている人が多い。

2) 4・7床室にいるB群患者とその看護者の場合

気になる度合いの高い項目の順位についての患者調査の結果は、大小便中、家族との会話中、診察・処置中の順であった(図1参照)。

それに対して看護者は、大小便中、清拭中、着替え中の順であった。両者の意識の相違については表5に記した。性別、年代別も含めて看護者のほうが気についていると強く意識していた。

表5 B群患者と看護者のプライバシー意識の相違

	患者性別				患者年齢別						
	男		女		10-29		30-49		50-69		
	患者	看護者	患者	看護者	患者	看護者	患者	看護者	患者	看護者	
着替え中	気になる	2	16	4	26	2	25	3	26	1	20
	どちらでもない	2	7	1	0	0	1	2	0	1	6
	気にならない	28	3	16	0	13	0	13	0	18	0
	カイ二乗検定	***	***	***	***	***	***	***	***	***	
大小便中	気になる	23	24	16	24	12	25	17	25	10	21
	どちらでもない	4	1	1	0	2	0	1	2	2	4
	気にならない	6	0	4	1	2	0	0	0	8	0
	カイ二乗検定	*	—		*	—		—	—	**	
清拭中	気になる	2	16	4	26	2	25	3	24	0	19
	どちらでもない	1	7	1	0	1	1	0	2	1	7
	気にならない	30	3	16	3	13	0	14	0	19	0
	カイ二乗検定	***	***	***	***	***	***	***	***	***	
診察・処置中	気になる	7	15	4	19	3	18	3	18	5	12
	どちらでもない	1	8	0	5	1	6	0	6	0	12
	気にならない	24	2	17	1	11	1	15	1	15	1
	カイ二乗検定	***	***	***	***	***	***	***	***	***	
家族との会話中	気になる	11	7	7	11	9	11	5	10	4	7
	どちらでもない	2	16	1	12	2	13	0	13	1	16
	気にならない	20	2	12	2	5	1	13	2	14	1
	カイ二乗検定	***	***	***	***	***	***	***	***	***	

カイ二乗検定：* P < 0.05, ** P < 0.01, *** P < 0.001,

— (有意差なし)

(1) 「着替え中」

男性患者より女性患者は気にしないと答えているが、看護者は気にしているととらえている。年代別も同様に看護者が気にしている。

(2) 「大小便中」

患者、看護者共に気になる場面であり、この患者群の他の生活場面に比べる

と、大小便時の患者と看護者のプライバシー意識の関連は低い。しかし、性別では女性より男性との間に有意差がみられ、看護者が思っている以上に男性患者のほうは気にしている結果であった。また、30代から40代では患者・看護者共に一番気に入っている結果であった。

(3) 「清拭中」

性別・年代別とともに患者より看護者のほうが気になっていると思っている。特に50代・60代の患者が気にしていない。

(4) 「診察や処置を受けているとき」

男女共に有意差があり、患者は気にならないと思っているが看護者は気になっていると思っていた。しかし、実数では男性患者にやや気になると答えている人が多い。

年齢別も同様であり、各年代ともに看護者のほうが気に入っているととらえている。

(5) 「家族との会話中」

性別・年代別とともに患者より看護者のほうが気になるととらえている。ただし、10代・20代は患者のほうが気にしている。

また、実数では看護者が他の項目に比べてどちらでもないとの回答が多く、クラメールの関連係数もやや低くなっている。

IV 考 察

患者は、入院という生活の場の変化により、日常の生活で習慣化している生活行動が様々に影響される。看護者は、生活の場であるベッドや周辺の環境を整え、患者がより快適に入院生活を送るために多くの援助を行っている。

患者の入院生活は、病棟・病室・病床と限定された空間の中で展開される。その中のプライバシーは、患者と患者との関係、患者と医療従事者との関係から論じられる。

寺島の調査によると、看護者が患者のプライバシーを守るために日常業務で

配慮していることは、「人目のあるところで診療や処置をしない」が多く、「入院時の面接などを他の患者や職員のいる場所で行わない」、「身体の不必要的露出をさける」と続いている⁴⁾。

今回の調査によると、援助を行ううえで看護者として患者のプライバシーへの配慮から問題となることは、A群の着替え中の男性に対してであり、家族との会話時の男性に対してであった。同じく着替え中の50代・60代の人に対する配慮であった。このように、寺島の結果と比較しても、A群患者に対する看護者のプライバシー意識が特徴的である。

また、今回の看護者の全体的な傾向として、男性に比べて女性のプライバシー意識を高くとらえ、また若い人ほどその意識が高いととらえていることがあった。それが患者とのズレとなっていた。

川口らの心理的な研究に、ある地方の大学附属病院の多床室患者を対象にしたテリトリーとプライバシーの意識に関する調査がある。138人の傾向を分析しているが、それによると、病室を中心に行き交際するうえでの患者のプライバシーについての意識は、性別では女性のほうが高い傾向にあり、年齢別では、若い人ほど高い傾向にあるという結果を示している¹⁶⁾。これは、本研究の看護者調査の傾向と一致している。

また、生活自由度別については、自由度が低い患者では〈診察・処置〉〈夜眠る〉に高い傾向がみられ、自由度の高い患者では、〈清拭〉〈家族との会話〉で高い傾向となった、とされている¹⁶⁾。川口らの結果は、本研究の患者の生活の自由度の高低とも傾向が違っている。

筆者は結果に示してきたように、神経系難病による入院という特徴をもった患者群と社会生活を送っている人々と比較的近い状況にある群に対し、それぞれの看護者群という視点をもった分析を行ってきた。

慢性の疾患で入院生活を送っているA群の患者の気持ちとその看護者の意識の相違は、小川の述べる患者の他者への依存度とプライバシーの欲求の変化に対する看護者の対応の固定化⁵⁾と同様の結果を示している。つまり、本調査の看護者は、患者の依存度が高いとプライバシーの欲求が低いととらえる傾向にあ

る。

このようなA群の看護者のプライバシー意識のズレは、どこからきているのであろうか。神経系難病は、治療の確立がされていない疾患であり、十年単位の長い経過と徐々に低下する病状があり、よくなることがない。しかも、多くは寝たきりとなり、全面的な介助を必要とする。そのため入院生活は看護者による生活支援がほとんどであり、患者の依存度が高い。しかも、生命維持のために人工呼吸器をはじめとした機器を用いる患者が多い。意識清明でありコミュニケーションは可能であるが、言語障害によってその意思は表情、口唇の動き、眉の動き、わずかな動作で表現される。患者は、発声できないことへの不安が強い。本調査の対象者も、身体機能低下のために書字の不可能な人が多かった。

このようにきわめて長期に慢性の経過をとり、しかも生活の自由が次第に失われていく患者のプライバシー尊重に対する援助が十分でないのは、いくつかの理由が考えられる。その1つに、数年にわたって続いている患者との関係に看護者の意識の低下があるのではないか。また、着替えとか身体を拭くとか、日常的で頻度の高い、しかも年齢層の高い患者に対するマンネリ化してしまった援助意識ではなかろうか。さらに表現方法が限られた患者であり、看護者の自己評価の難しさもある。この調査結果を看護者へフィードバックすることで、毎日のケアを見直す機会となればと考える。

一方、整形外科疾患患者および耳鼻咽喉科疾患患者は、外科的治療により、比較的短期間の入院で健康状態が回復する。しかも、全面的な介助を必要とする人が少ないと特徴をもっていて、社会生活を送っている人に近い。患者のプライバシー意識が、大小便中が高いことは、病院の排泄に関する設備・用具や使用方法などの配慮のなさからわかる。

その他の排泄中、清拭中、診察・処置中などでは、そのズレがいずれも看護者のほうが患者の意識以上に気にしている結果であった。

以上、病床生活におけるプライバシーについて、患者と看護者の意識には多くの相違がみられた。本調査にみる看護者のプライバシー尊重の意識は、寺島

が指摘している⁴⁾ことと同様に、受けた基礎教育に大きく影響されていると考える。看護者は、場面別・性別・年代別に一様にとらえる傾向にあった。本来、看護における患者のプライバシー尊重のあり方は、個別性に沿った援助と考える。基礎教育のあり方に加え、日頃行っている看護を患者の心理面からきめこまかに評価していくことが必要であろう。

対象が限定されているため一般化できないが、患者にとってのプライバシーが、患者の望んでいない侵入事物に対して調整しようとする心理的な防壁であると考えると、看護者個々の意識のあり方が、患者にとって侵入事物の1つの存在となるということを考え続けたい。

V まとめ

病床生活における環境について、多床室入院患者の基本的ニードの1つであるプライバシーの面から調査した。慢性難治性疾患により全面的援助を受けながら長期に入院している患者27人（A群）と、短期入院で援助を必要とする人が少なく社会生活に近い入院生活を送っている患者54人（B群）、およびその看護者69人の実態は以下のようであった。

(1) 患者のプライバシーの意識は、病床生活における行動場面によって気になる度合いが異なっていた。A群では着替えや清拭が気になる場面であり、B群では排泄行為時が最も気になっていた。性別では、両群とも女性にプライバシー意識が高かった。

年代別では、A群が年代が高いほど隣のベッドの人を気にしていた。B群は、30代・40代の患者が大小便中を他の年代の人より気にしていた。A・B群間の有意差は着替え中および清拭中に大きく、女性と高年齢者が気にしていた。

(2) 看護者は患者のプライバシーについて一律にとらえる傾向が強く、生活場面では、大小便中、清拭中、診察・処置中、着替え中、家族との会話中の順に気にしているととらえていた。しかも気になる度合いも場面差がなく、患者は気にしているという答が多かった。

性別をみると、男性に比べて女性のプライバシー意識を高くとらえていた。また、年齢については、年代が若いほど気になり度が高いととらえている。30歳以上の神経系難病患者群の着替えについて、どちらでもないと答えている看護者が多く、あまり気にしていないととらえる傾向にあった。全体的にB群の看護者が一様にとらえる傾向が強かった。また、看護者間に有意差はなかった。

(3) 性別・年齢別からみた日常生活場面におけるプライバシー意識の程度について、患者と看護者の意識とに統計的に多くの有意な関連があった。

看護者として、患者のプライバシーへの配慮から問題となるズレは、A群の着替え中の男性であり、家族との会話時の男性であった。同じくA群の着替え中の50代・60代の人であった。

このような結果からいえることは、看護者は患者のプライバシー意識を生活場面・性差・年齢について固定的にとらえ、患者の病状・入院期間・生活の制限の変化が患者の意識を変えていくことに対応できていないことである。そのためには、看護を評価する視点に立ち日常的に患者心理を把握するいくつかの方法をもたなければならぬと考える。

本研究は、多床室に入院中の81人およびその看護者69人の分析であり、今後、環境に対する心理的側面についての研究を進めるとともに社会的・物理的環境についての調査を行うことが課題となる。

文 献

- 1) 野々村典子・中野育子：入院生活におけるテリトリーとプライバシー意識—神経系難病患者調査—、第8回日本保健医療行動科学会大会抄録集、35、1993。
- 2) 野々村典子・中野育子：病床環境に対する患者意識と看護者意識の相違—プライバシー、第9回日本保健医療行動科学会大会抄録集、25、1994。
- 3) 長倉康彦他：入院患者の日常生活上の好み習慣と病室環境に対する意識・評価について—聖路加国際病院のケーススタディ、日本建築学会大会学術講演梗概集、1293-1296、1982。
- 4) 寺島敏子：看護婦のプライバシー保護意識の高揚と環境づくり、看護展望、10(12)：

8-12, 1985.

- 5) 小川圭子：看護における患者のプライバシー尊重，看護教育，26(8)：464-468, 1985.
 - 6) 村田明子：現代人のプライバシー意識と病室空間，看護展望，12(4)：36-40, 1987.
 - 7) 松岡淳夫：入院環境についての基礎研究，看護展望，12(4)：42-46, 1987.
 - 8) 上野淳：患者の生活環境としての病室・病棟を考える，病院設備，29(5)：409-417, 1987.
 - 9) 長澤泰：病室における看護作業領域，病院設備，29(5)：397-406, 1987.
 - 10) 川口孝泰・上野義雪・安藤正雄：病室の空間の構成に関する基礎資料—壁の位置が患者に及ぼす心理的影響—，日本建築学会大会学術講演梗概集，553-554, 1988.
 - 11) 川口孝泰・松岡淳夫：病室におけるテリトリー・プライバシーに関する検討—基礎概念の提案—，日本看護研究学会雑誌，12(1)：74-83, 1989.
 - 12) 川口孝泰・上野義雪：病室計画における患者の意識調査—医療を受ける側の心理について—，日本建築学会大会学術講演梗概集，453-454, 1990.
 - 13) 上野淳：療養と看護の環境—病棟・病室環境の計画課題をめぐって—，看護学雑誌，54(12)：1170-1177, 1990.
 - 14) 服部朝子：病室や病棟環境に対する患者の認知—環境認知と精神状態および日常生活行動との関係，看護研究，24(2)：21-40, 1991.
 - 15) 川口孝泰・松岡淳夫：患者のテリトリー及びプライバシーに関する検討—病床周辺を中心として—，日本看護研究学会雑誌，13(1)：57-62, 1990.
 - 16) 川口孝泰・松岡淳夫：病室におけるテリトリー及びプライバシーに関する検討—多床室における患者の意識調査—，日本看護研究学会雑誌，13(1)：82-94, 1990.
 - 17) 馬場恵子他：入院中の生活規制に関する意識調査，共済医報，40(3)：397-404, 1991.
 - 18) 伊藤誠：病室の設計について一個室か相部屋か—，千葉大学工学部研究報告，44(2)：1-12, 1993.
 - 19) 川口孝泰・勝田仁美：多床病室の入院環境評価に関する検討，日本看護科学会誌，13(3)，222-223, 1993.
 - 20) 川口孝泰・勝田仁美：多床病室における療養の場の特性に関する検討，日本看護科学会誌，14(3)，212-213, 1994.
-